



TITLE:

きらめく動物たちの命と海:久保田
信の白浜だより(その45)

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. きらめく動物たちの命と海:久保田信の白浜だより(その45). うみひろも 2013, 119: 11-13

ISSUE DATE:

2013-05-16

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180267>

RIGHT:

© 海の生き物を守る会

5. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その45)】

海面滑走の淡水性アメンボ ～空飛ぶ「バンパイア」～

アメンボは、池・水たまり・溪流などの水面をすいすいと滑走するおなじみの昆虫である。しかし、2004年3月29日、白浜町の瀬戸漁港で合計22個体ものアメンボが群れて滑走しているのを目撃した。この瀬戸漁港ではこれ以前の過去5年間に8例の淡水性アメンボの滑走に遭遇したことがある。単独滑走が4回で、1対のペアーでの滑走例を3回目撃していたが、今回はなんと多数個体の集団だったので驚いた。この日はなぎで、波浪や風で瀬戸漁港内に吹き寄せられた訳でもない。アメンボの繁殖期に

入っているとはいえ、卵が育たない海水に集合した理由はなんだろう？ 産卵期にしばしば見受けられるアメンボ同士の「おんぶ」行動も見られなかった。

今回は面白い行動も目撃できた。アメンボが海面を移動中、複数の小魚が襲ってきたのだ。しかし、忍者が手裏剣の攻撃を避けるように「ホップ、ステップ、ジャンプ」を繰り返しながらアメンボは見事にかわして逃げていった。しばらく瀬戸漁港で腰を据えて観察していると、アメンボはフワリと飛行して大空高く舞い上がっていった。アメンボの飛行に巡り合うことは珍しく、わが人生でも3度目という貴重な遭遇だった。これまでアメンボの飛行に遭遇したのは、北海道厚岸町愛冠岬と、現在自宅のある和歌山県上富田町南紀の台だけである。

「バンパイア」

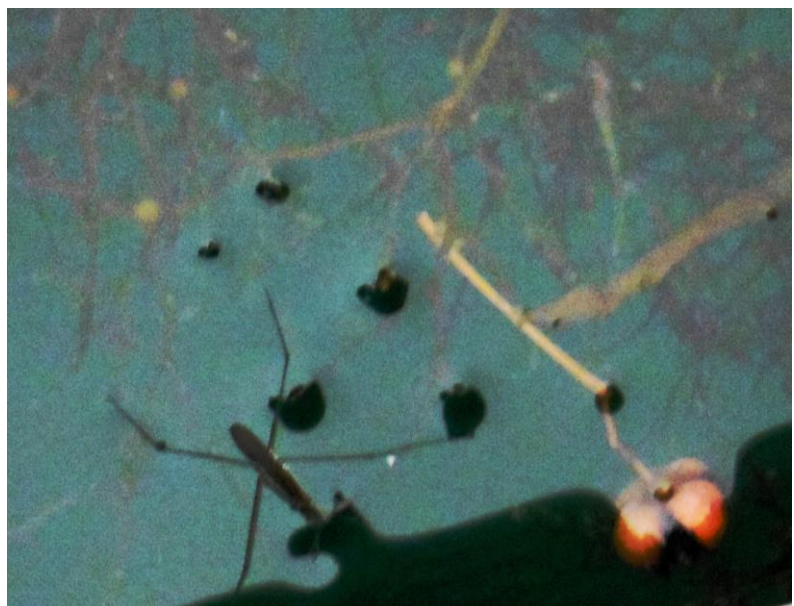
アメンボという名前の由来は、つかまえて小瓶などに入れて臭いをかぐと飴のような匂いというので名付けられたそうである。実際にかいでみても、食欲をそそる飴の臭いはしなかったの、その真偽は定かではない。細長い胴体を水面から浮かせ、くの字形の長い2対目の足先で水をかいて軽快に進む。後足は、舵取り役のためか、中足よりも短い。前足はもっと短く目立たないが、餌捕り用で、触覚のそばに添えて獲物を待ち伏せている。

アメンボは目も良いが、足先で獲物の振動を感じ取って忍び寄る。水面に落ちた昆虫類にとがった口を突き刺して消化液を注入し、筋肉や内臓を溶かして体液を吸い尽くす。その様子はハエなどを水面に投げ込むと、簡単に観察することができる。まさに「バンパイア」！である。普段はおぼれかけた虫を食用にしているが、餌が少ないと共食いまでする。

暖かい時期に滑走するアメンボ

上記の記録では瀬戸漁港への出現時期は春から初夏の3～6月で、1回だけ秋(10月)に出現している。だが、厳冬や真夏に姿を見ることは少ない。早春に姿を見せたアメンボの成虫は、交尾・産卵を終えれば死んでしまう。孵化した幼虫が成長して、秋になると再び成虫が見られるようになり、冬を迎えると成虫のまま水辺の落ち葉の下などで越冬して春を待つ、という生活史に関係しているためだろう。

瀬戸漁港での不思議なアメンボと出会って以来、このような海で平気ですいすいと泳ぐアメンボは白浜町



のあちこちで遭遇できている。ごく最近だと、2013 年 3 月に白浜町堅田漁港の海水面を滑走するアメンボ 1 個体に遭遇した（図）。やはり時期的には 3 月であった。

近年、中性洗剤による池沼の汚染が叫ばれている。アメンボにとっても死活問題になっている。洗剤の成分によって、水面に浮かぶための足先の密生した毛の中まで水が染み込んでしまうためだ。水に浮く『水遁（すいとん）の術』が使えなくなり、うまく飛べないと溺れてしまうこともある。アメンボは生まれたての時は、羽も発達しておらず飛べないので、さらに汚染が進むと絶滅に追い込まれる危険性もあるだろう。目に見えない化学薬品の罪はへたをするととても大きい。

